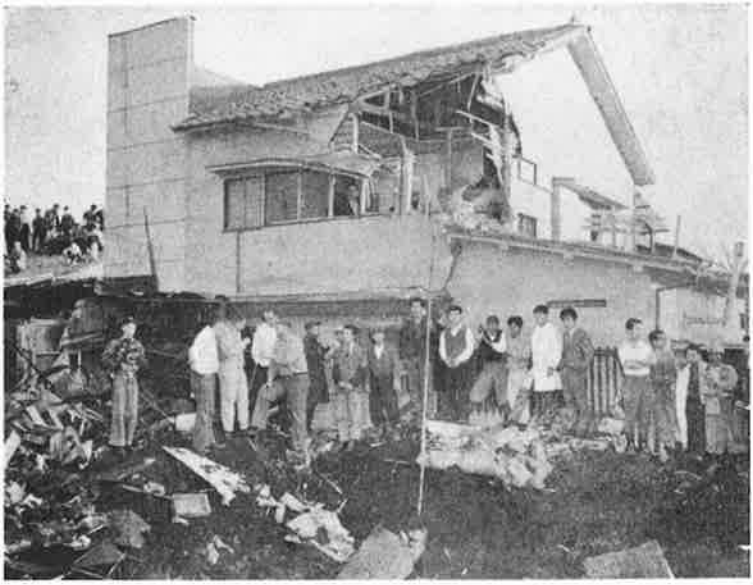
昭　和　39　年

米軍機墜落事故災害誌

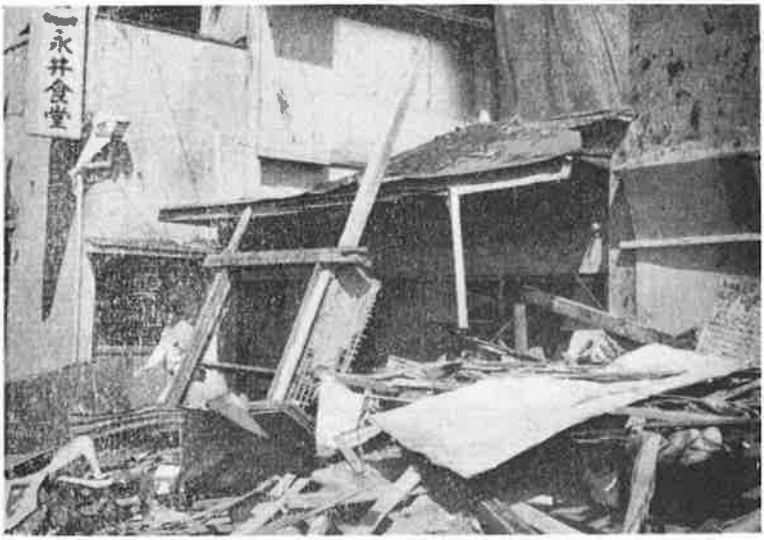
〔復刻版〕

町　田　市

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています



ジェット機の尾翼によって切断された歯科医院（朝日新聞社提供）

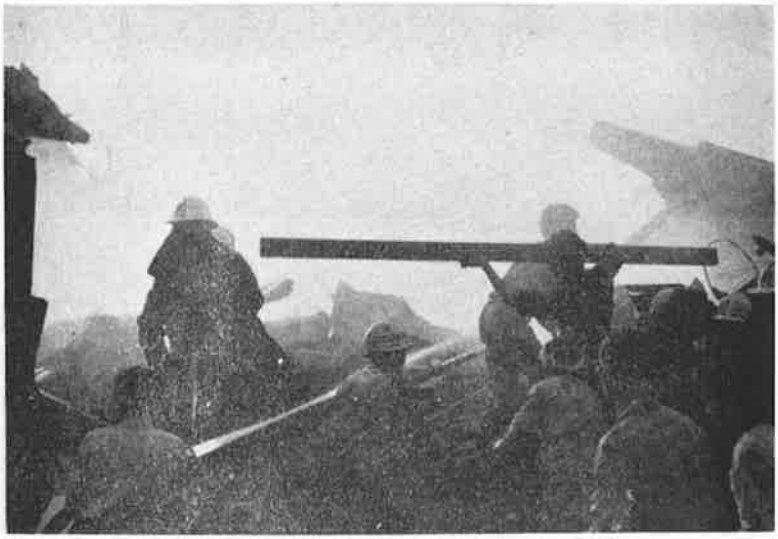


破壊され飛散（都道上）した商店街の惨状

墜落直後（消防隊到着前）倒壊した洋裁店建物の下に被災者を発見する
（東京新聞社提供）

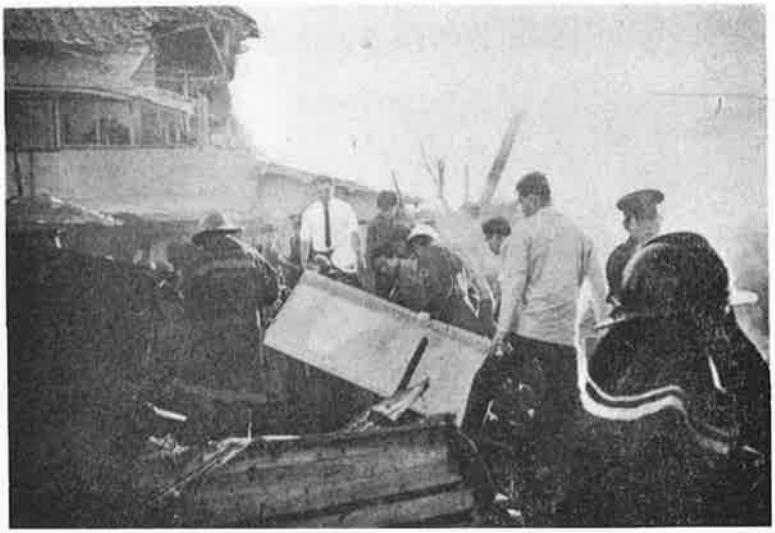
墜落後約３分経過（消防隊到着前）付近の者による被災者の救出作業
（東京新聞社提供）

町田消防署第１小隊到着時（約６分経過）の延焼状況、
官民一体の活躍（東京新聞社提供）



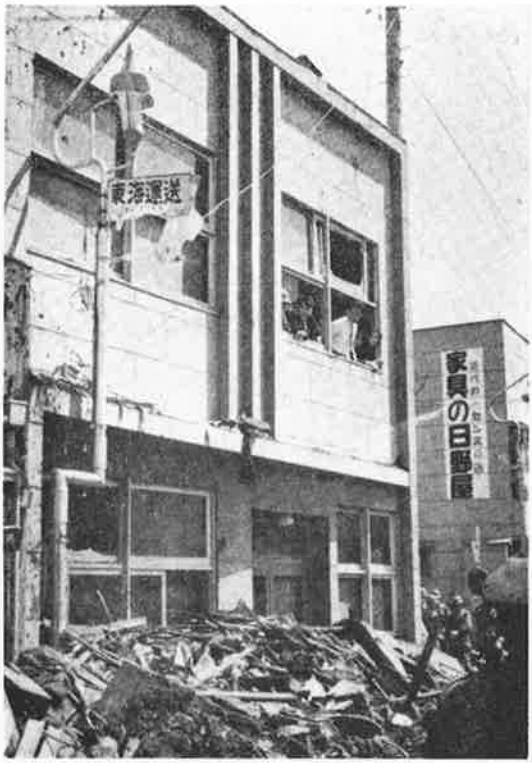
倒壊燃焼した家屋の下から被災者救出に懸命の消防隊と地元民
（東京新聞社提供）

肉店家族の救出作業（右上方）と墜落口付近の光景（東京新聞社提供）



犠牲者が発見された墜落口付近（東京新聞社提供）

肉店家族救出中の光景（朝日新聞社提供）



破壊され飛散（都道上）した商店街の惨状

被災者用応急住宅　米軍簡易ハウス建設作業　三和遊園地

墜落地跡に被災者により建てられたプレハブ住宅

鎮火後上空より見た現場付近の状況（朝日新聞社提供）

墜落したF8U-2　クルーセイダージェット機同型

（航空新聞社提供）

注　超音速艦上戦闘機で九年前の一九五五年に海軍機となりテスト飛行で一六九〇キロメートルのスピードを記録、二〇ミリ砲四門と原爆兵器も積載可能。一型に続いて二・三型も誕生、三型は全天候ジェット機で、大気圏の九五%の高さに達し、音速の二倍以上で飛ぶという新鋭機。

（三九年四月六日付読売新聞朝刊より）

目　　次

序にかえて

第１章　被害概況 ……2

　第１節　被害の概要 ……2

　第２節　被害の状況 ……5

第２章　措置及び活動 ……8

　第１節　市の応急対策 ……8

　第２節　活動態勢 ……9

第３章　補償問題……15

　第１節　市の補償交渉対策……15

　第２節　政府・国会の動向……16

第４章　各方面の協力……18

　第１節　日赤東京都支部……18

　第２節　民間団体の協力……18

　余録……19

　　１．災害日誌……19

　　２．関係者のメッセージ……21

　　３．救助活動協力者並びに感謝状関係……24

　むすび……25

序にかえて

昭和39年４月５日、町田市の商店街に米軍ジェット機が墜落した。突発的瞬間惨事は死者４名、重軽傷者32名、家屋の全半壊27戸の被害をもたらした。事件の地点より直感的に、被害（火災を含む）の拡大することを憂えたが、関係者懸命の救助、防御活動により類焼を未然に防止でき得たことは幸いであった。その後、同年９月８日隣接大和市において山林の樹木をなぎ倒し、鉄工所を粉砕し、死傷者を出し、なお火のかたまりとなって２千メートル余りも暴滑走した墜落事故を思い起こすとき戦慄を覚える。この墜落と同じ状況であったら、死傷者の数も計り知れず、火災も数百戸いや町の大半が消失したことでありましょう。

この種の事件としてはあまりにも大きく、かつ、国際的影響もあり、ジョンソン米大統領の異例のメッセージのあったことでも計り知れることである。

首都圏整備法に基づく指定地として、年々１万余りの人口増をみ、いまや12万余り、数年ならずして20万の中都市になろうと驚異的な発展をなしつつある平和な市の歴史に悲しむべき一ページを残すこととなった。科学の進展いちじるしい今日、今後、「思いがけない災害が、思いがけないときに思いがけないところに起こってくる。」

不測の災害に対し、常に待つある態勢を確立し、市民の生命財産の擁護と、人心安定に努めなければならないことを痛感せざるを得ない。

この災害に対し、各方面から寄せられた激励と援助、特に消防隊を始め、自衛隊、関係機関、市民のご協力は絶大なものであった。ここにあらためてお礼を申し上げる次第である。

この記録は、当時実際に活躍された機関の資料をもととして、できるだけ忠実にまとめたつもりであるが、混乱のさなかでは記録もれ、あるいは、紙面の都合上意のつくせぬ点もあることと思う。何分のご了承をいただきたい。

犠牲になった４人の方のご冥福と被害者の方々の今後のご多幸をお祈りするのみである。

この小冊子が、読まれる方々の何かの参考ともなれば幸いである。

最後に本稿起草にあたって特段のご協力をいただいた方々に心からお礼を申し上げ、序にかえる。

昭和40年　　月

町田市長　　青　山　藤　吉　郎

第1章　被害概況

第1節　被害の概要

町田市の中心部繁華街の真只中に、昭和39年4月5日午後4時28分頃、米軍航空機が墜落し大惨事が発生した。

国鉄横浜線原町田駅から約300メートル、小田急線新原町田駅から約1キロメートル離れた原町田1274番地に、この日午後、沖縄の嘉手納（かでな）航空基地を飛び立ったアメリカ海兵隊岩国基地所属チャンスボートF8U－2「クルーセイダー」ジェット戦闘機（乗員R・L・ボーン海軍大尉）が定期訓練飛行のため厚木基地（厚木基地まで約10キロメートル、基地滑走路と一直線上）に向かう途中、故障を起こし、高度6,000フィートの上空よりきりもみ状態にて墜落、言語に絶する惨状を引き起こした。

4月5日は日曜日、桜の花もようやくちらほら、朝からおだやかな日和で、家族連れや団体客で各地の行楽地はその年最高の人出であった。

町田市の繁華街も近隣近郊から集った子供連れの買物客で混雑していた。午後4時28分頃上空を飛んでいたジェット機が「キーン……」という耳をつんざく音とともに突然「ズシーン」という大地をも裂けるような地ひびきをたてて商店街の一角に墜落した。

ものすごい衝撃が原町田2丁目商店街一帯をゆるがせ、一瞬のうちに民家4棟が吹きとび、土砂や機体の破片も半径50メートル四方にわたって襲いかかり、20数軒の家屋を全半壊した。

ジェット機墜落と同時にとび散った航空機の燃料に引火、付近の家屋に延焼し、黒煙は天

に沖しものすごく、逃げまどう買物客、倒壊した建物の下から救いを求める負傷者の悲鳴と叫び、付近一帯は阿修羅と化し大混乱となった。

町田消防署、町田市消防団、町田警察署、隣接相模原市消防本部の各隊は市民協力のもとに救助即防御の態勢で火勢をおさえての救出作業は困難をきわめたが、焼死寸前にあった生存者４人の救出、消火に成功した。誠に官民一体の努力のたまものであり生命の尊さを目のあたりにみせた。

一方、負傷者はいち早く駆けつけた町田消防署救急隊及び隣接救急隊により応急手当の後、次々と病院へ送られた。町田市長は直ちに臨時災害対策本部を設置し、情報の収集、避難先、救護、死体安置所、現地連絡本部、関係連絡班等を決定、指示し、次々と駆けつける職員を各部署に配置、万全の活動を開始した。夜になって救出作業を照らす投光器がすさまじい墜落模様をあらためて冷たく写し出す中から４人の遺体が発見され、人々の沈黙は悲しみの声となり、やがて怒りとなり全市に広がり全国に伝わっていった。

平和に暮らしていた市民にとって、この事故は文字どおり空から突如降ってわいた出来事、火を吐く巨大な金属のかたまり、それは一瞬にして、死者４名、重軽傷者32名という惨事を引き起こした。

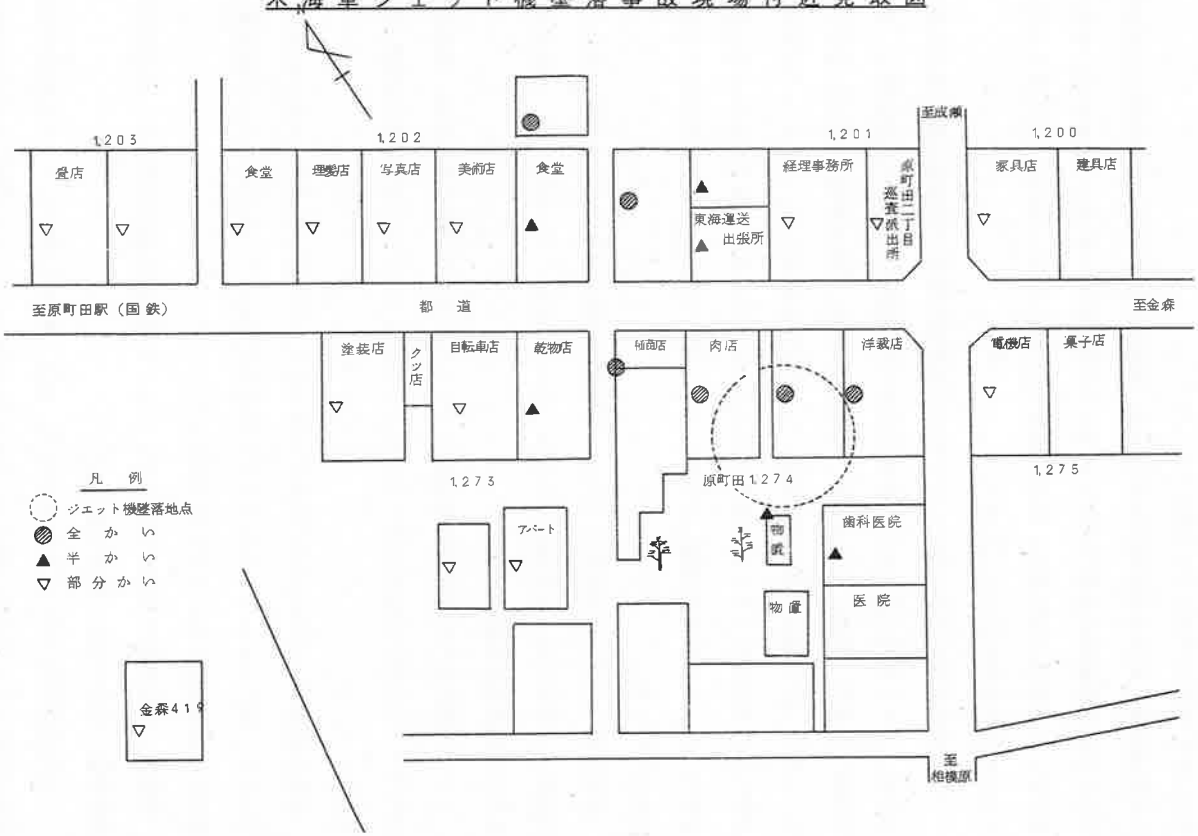
ジェット機のボーン大尉は高度6,000フィートの上空で落下傘により脱出、現場から1.4キロメートル離れた団地に降下し、かすり傷を負っただけで米軍基地の病院に収容された。

恐怖と混乱の一夜明けた朝の現場には吹っとんだ洋裁店と精肉店、民家が直径10数メートル、深さ５メートル位のすりばち型の大穴と変わり、むごたらしい事故現場は照りつける太陽のもとにさらけ出されていた。

墜落穴、家屋倒壊の状態から推して、ジェット機は南南東の方向より、ほぼ60度の角度をもって突っ込んだ模様である。

これを裏付けるものとして、墜落地点、木造二階建約153平方メートル建物の後方半分が粉砕されて北東側に飛散し、残部も同方向の６メートル道路にかぶさる状態で押し出されて倒壊していた。

米海軍ジェット機墜落事故現場付近見取図



第２節　被害の状況

１．人的被害

災害は思いがけないときに思いがけないところに起こるものである。

一瞬にしてこの町田市を襲ったジェット機墜落事故は、楽しく家族とくつろぎ、また日曜日の買物に出かけた人、たまたま現場を通りあわせた人、商売にいそしみ働いていた人々の頭上に不幸をもたらし、４名の死者と多数の重軽傷者を出した。

死者４名のうち１人は解剖の結果、焼死と判定されたが、遺体が墜落穴のふちから発見されていることから、直接の死因は墜落衝撃によることは間違いない。

他の２名はいずれも自宅において、１名は付近を通行中に倒壊家屋の下敷きとなっていずれも圧死した。

重傷者９名のうち２名は、消防隊とこれに協力する市民によって、炎上する倒壊家屋の下で身体の自由を失い、焼死寸前の状態から救出されており、さらに２名が倒壊家屋の下から救出された。

重傷者のうち２名は、通行中に飛散物のため、他の７名は、いずれも倒壊家屋の下敷きとなって負傷している。

出火原因はジェット機の燃料（ケロシン）タンクが墜落と同時に衝撃により破壊したので、ジェット燃料が飛散し、機関部から出火したものと推定される。

当日の気象状況

天候	晴	風位	南西風速３ｍ／ｓ
気温	22℃	湿度	46％

人的被害

事　　項	人　員
死　　者	4
重　傷　者	9
軽　傷　者	23

負傷者収容場所

病　院　名	受診患者数	要入院	通　院
原町田病院	14	4	10
伊藤病院	9	5	4
国立相模原病院	1		1
市立中央病院	1		1
小田桐病院	1		1
田村眼科	3		3
石上接骨院	3		3
日赤現場医療班	②		②
計	32	9	23

2．物的被害

一瞬のうちに民家４棟を吹きとばし、20数棟を全半壊したこの惨事も、不思議なことに機体の墜落して来る様子を目撃した者は１人もいなかった。

この付近は厚木基地まで約10キロメートル、基地滑走路と一直線上にあるため、日夜ジェット機が飛行しているので「キーン……」という耳をつんざく異様な音にも町田市民は耳なれて驚くどころか、上空を見るもの１人もいなかったためである。

また被害の局所に限られたのも、上空において機体が爆発あるいは分解せず、搭載燃料も残り少なく、南南東よりほぼ60度の角度をもってきりもみ状態に突っ込んだためであり、わずかに2,000メートル余り離れた民家の屋根に燃料タンクが落下、小被害をあたえた以外はあまりみられなかった。

（1）住家等の被害

事　　項	数　量	住　　所
全　　壊	7	原町田1274　他
半　　壊	5	〃　〃
部　々　壊	15	〃　1201　他

（2）通信電気被害

電　話　　15回線不通

電　気　　3,850世帯停電

（3）その他

路面に土砂50立方メートル

家屋の倒壊飛散物　トラック10台分

バス不通　2.5日

第2章　措置及び活動

第1節　市の応急対策

1．臨時災害対策本部設置

急報に接した町田市長は、直ちに登庁、事態の重大なることを察知、全職員に緊急出動を命ずるとともに情報の収集にあたらせた。

急を聞いた河合市議会議長外市議会議員、梶助役以下市職員が次々と駆けつける中に臨時災害対策本部を設置、直ちに、

1．情報の収集

2．避難先　市公民館

3．現地連絡本部　山崎久和宅

4．死体安置場所　市内勝楽寺

5．関係防災機関の連絡調整

6．消防団現地連絡本部　山崎久和宅

7．物資調達　寝具、食糧等

等基本方針を決定、関係防災機関と密接な連絡を保ちつつ、罹災者に対する救助に万全を期す態勢を整えた。

電話、テレビ、ラジオ、有線放送等により事態を知り駆けつける職員（130名）は、次々と部署に配置され、その大部分が徹夜で活動処理に当たった。

2．市議会の動向

前述の如く河合議長外議員の大半が駆けつけ、理事者と一体になり積極的活動に奔走するとともに翌6日午前9時より全員協議会を開き、罹災者に対する最大限の補償とかかる事故の再び引き起こさぬよう万全の処置を望む決議（後述）をし、日本政府、並びに在日米軍、及び米国大使に決議文を手交することとした。また、罹災者対策、災害地復旧に理事者と一体となり努力した。

続いて全員協議会を数回開き、補償問題、特に被災住宅については深刻な問題がよこたわり、非常に苦慮努力された。

3．被災者に対する援護措置

直ちに被害対策本部を設けた市は、被災者の救済のため、先ず市公民館に収容し、衣類、寝具等必需品を給貸与するとともに給食を実施した。

遺体は現場近くの勝楽寺へ安置し、その遺族22名も勝楽寺へ迎え、衣類、寝具などを整えるとともに給食を実施した。

被災者の住宅については、直ちに米軍厚木基地部隊に要請し、原町田２丁目、三和遊園地広場に３棟６世帯分の応急住宅を建設した。

４月６日、遺族の要望、その他の状況により、死体検接を待って、午後９時より、勝楽寺において、遺族、各機関、団体、一般市民が多数参列するなか、市長が祭主となり、人々の悲しみのなか、合同慰霊祭をとり行った。

4．義援金品

米軍ジェット機の墜落事故が一たび導かるや東京都募金会を始め多くの団体、個人より多額の救援資金及び日本赤十字社、その他から毛布、衣料、缶詰等が送られ、被災者にそれぞれ配分、手渡したが、被災者に直接見舞われたものも相当数あり、各方面の温情誠に計り難いものがある。その内容について個別に列挙することは省略させて頂きますが、これらの方々に対し誌上をもって厚くお礼申し上げる次第であります。

第２節　活動態勢

1．町田消防署消防隊および町田市消防団

（1）消防活動

イ　消火活動

４月５日（日曜日）午後４時31分報知電話により火災発生を覚知（町田消防署）した。

第１出場　午後４時32分

第２出場　午後４時32分

特命出場　午後４時54分　救急隊

特命出場　午後６時56分　救出作業隊

特命出場　午後８時４分　　照明小隊

消防団は第１分団１小隊に続いて次々出動

午後５時10分鎮火した。

町田消防署、町田市消防団、隣接消防署よりこの火災に出動した。出場部隊、出場人員は、次のとおりである。

ロ　消防署出場部隊および人員

第１出場

防ぎょ　町田１小隊、町田２小隊

第２出場

救　出　富士森２小隊、調布１小隊

特命出場

救　出　八王子１小隊、立川１小隊、武蔵野２小隊、船橋１小隊、大宮前１小隊

照　明　永田町照明隊

救　急　町田救急隊、成城救急隊、日野救急隊、調布救急隊

総出場車両14隊（14台）、消防職員米山順二町田消防署長以下104名、外に神奈川県相模原市消防本部ポンプ車３隊16名の出動応援を得た。

ハ　町田市消防団出場部隊および人員

第１分団第１部１小隊、２小隊、第２部、第３部、第４部、第５部

第２分団第４部、第５部、第７部

第３分団第５部

第５分団第２部、第４部、第５部

総出場車両13隊（13台）、消防団員五十子賢治団長以下239名、延298名

（２）救急隊の活動

イ　負傷者収容状況

出火報とともに第八方面本部は、事態の重大さを察知して、町田、日野、調布の各救急隊に対し特命出場を命じ、さらに警防部は成城救急隊を応援出場させた。

午後４時38分町田救急隊は指令と同時に現場に急行したが、現場の約80メートル手

前で先行したポンプ車が道路脇の貯水槽に部署しており進行不可能のため、隊員は、担架を携行、現場に到着、運び出される負傷者の応急処置をすませ、次々と病院に輸送した。

一方、調布、成城、日野、各救急隊は次々と到着、救出者、負傷者の手当、輸送に活躍した。

2．自衛隊

（1）出動の経緯

師団司令部当直長は、NTVニュース（午後4時50分）で米軍機墜落事故を知り、午後5時以降町田警察署及び警視庁警備課と連絡をとり、適時状況を把握し、災害対処について検討を開始した。

師団司令部は午後9時45分非常勤務態勢に転移するとともに、各部隊に対し部隊派遣の準備を命じた。

被災者の救出、応急救援作業は終了したるも、6日に実施される応急復旧作業を自主的に支援する目的をもって派遣準備に着手する。

同10時10分、偵察班は練馬を出発し、6日未明0時30分現地に進出、情報収集を開始、6日朝、東京都知事の派遣要請をうけ、自衛隊法第83条第1項により派遣を実施することとなった。

派遣隊長は、主力の出発に先行し、6日午前1時30分練馬を出発、同3時30分現地に到着し、町田市災害対策本部との調整を開始した。

派遣隊主力（約100名）は、6日午前5時練馬、朝霞両駐とん地を出発、同7時20分現地に到着、派遣隊長指揮に入る。

（2）作業隊の編成

米軍機墜落事故に伴う、東京都町田地区第1師団災害派遣隊と名づけ、第1偵察隊副隊長船橋三佐を作業隊長とし、次の各隊から総員144人によって作業隊が編成された。

派遣隊の編成装備

差し出し親部隊	人員数	車両・ヘリコプター隊							
		1/4t	3/4t	2 1/2t	4t	ドーザー D－8	20t クレーン	セミ トレーラー	ヘリコプター H－13
第1偵察隊	30	7	1	1					
第1普通科連隊	70	2		4					
第1通信大隊	15	1	1	2					
第1施設団	13	2			1	1	1	1	
師団司令部付隊保安警務隊	4	2							
第1飛行隊	4								2機
調査隊第1師団司令部派遣隊	2	1							
師団司令部	6	2							
計	144	17	2	7	1	1	1	1	2

延災害派遣人員	284人
延車両数	
トラック（1/4t）	36台
〃（3/4t）	4台
〃（2 1/2t）	14台
ダンプ（4t）	2台
トラックアングルドーザー（D－8型）	2台
クレーントラック（20t）	2台
セミトレーラー（20t）	2台
計	62台

（3）作業の経過

4月6日午前11時から現場検証に並行して埋没機体破片の発掘作業と一部倒壊家屋の整理を開始した。

本格的復旧作業に入った派遣部隊は、主力をもって倒壊家屋の整理を実施、一部をもって検証支援作業を行うも午後6時までに墜落機の「エンジン」部の発掘ができなかったため、部隊は町田市災害対策本部と協議した結果、引き続き夜間作業をもって全面的に復旧作業を行い、破壊口を除き、午後9時25分作業を終了した。

午後11時、災害対策本部、町田警察署、及び関係者が協議の結果、7日以降の検証は再び中止することとなったので、町田市長は部隊に対し、破壊口の整地作業及びこれに関連する半壊の木造建家屋の取りこわし整理作業を要請、部隊主力は7日午前8時より市当局及び関係機関と協力し、半壊家屋の取りこわし整理作業並びに陥没箇所の整理作業を再開し、午後2時30分これを完了したので、同3時派遣部隊は現地を撤収し、午後6時55分原態勢に復帰した。

主　要　成　果

墜落現場の全般整地作業　　312立方メートル

土量　　150立方メートル

検証支援作業（掘開）　　20立方メートル

埋立作業　　20立方メートル

道路啓開　　30立方メートル

全壊家屋整理作業28坪　　トラック20台分、現場から2.5キロメートルの市役所分室に運搬

米軍機の破片収集　　トラック1台分

3．警視庁

事故発生とともに第八方面本部長指揮のもとに町田警察署115名、第1機動隊3名、第3機動隊63名、第4機動隊45名、計226名を動員し、遺体収容、負傷者救護、雑踏整理、交通規制等、関係各機関と協力、徹宵その任にあたった。

6日、警視庁捜査一課、鑑識課各員は東京地検八王子支部検事及び米軍事故調査委

員とともに事故原因の究明、災害状況調査を行う。

一方死体の解剖は6日午後1時より市内小田桐病院において斉藤慶大教授指揮執刀のもとに同夜午後8時30分まで慎重に行われた。

4．医療機関

事故発生の日は日曜日のため医師、看護婦とも手薄であったが、幸い、原町田病院、伊藤病院ともに被災地に近かったためすぐさま、医師、看護婦の動員を行い、万全の方途を講じ、この両病院に前述の如く大半の処置をあおぐことができた。

町田市立中央病院は臨時対策本部からの指令により非常態勢を整え待機したが、軽傷者1名の治療ですんだ。

5．エンジンの行方

墜落ジェット機のエンジンは土中深くめりこみ、関係機関立ち会いのもとに発掘を開始したが、付近建物の倒壊する危険が増大したので、作業中数度の協議を繰り返したが、関係者協議の結果、「土中20メートル位の深さにあるエンジンは証拠能力があまりない。」との専門家の意見により、発掘を打ち切り、そのまま埋めてしまい、今なお土中深く眠っている。

今後、再び発掘されることなく永久に眠り続けることでありましょう。

第3章　補償問題

第1節　市の補償交渉対策

4月6日午前8時から、町田市役所会議室に緊急市議会全員協議会を開き罹災者の補償、救済について協議するとともに、日本政府、並びにアメリカ政府に対し強く抗議することとし、次のとおり決議がなされ、市長、議長の連名で、在日米軍最高司令官、米国大使、防衛庁及び外務省に対し要請書を提出した。

決　議　書

今回の米海軍戦闘機の本市市街地への墜落事故は最大の不祥事であり、今後かかる事故を再び起こさぬよう万全の処置を望むとともに、罹災者に対しては、最大限の補償をされるよう要望する。

右決議する。

昭和39年4月6日

町　田　市　議　会

要　請　書

去る4月5日厚木基地に向かう途中の米海軍F8U－2ジェット戦闘機が、本市の繁華街に墜落し一瞬にして死者4名、重軽傷者32名の痛ましい犠牲者をだす惨事を引きおこしましたことは最大の不祥事であります。

ここに本市は、町田市議会の決議により市民の生活と生命を守るため、今後かかる事故絶滅のため万全の措置をとられるよう要望するとともに、今回の事故による補償については、その損害を正しく評価し、被災者に対し、ただちに完全かつ充分なる補償と再起のため最大の援助をされるよう措置されることを要請いたします。

1964年4月20日

東京都町田市長　　青　山　藤吉郎

東京都町田市議会議長　　河　合　暁

事故補償交渉打合会

町田市長及び議長は４月８日市役所会議室へ、東京防衛施設局及び立川防衛施設事務所の関係係官並びに被災者の参集を求め、墜落事故補償交渉打合会を開き、補償問題につき協議の結果、

１．今後の交渉は市当局と議会が一体になって被災者のため協力する。

２．東京防衛施設局は、臨時に市役所に事務所を開設し、被災者に充分な補償ができるよう努力する。

こととなり、４月８日以後しばしば市長、議長は補償問題について各方面と折衝努力し、また防衛施設局係員も真剣に被害者に対して懇切ていねいに申請指導することはもちろん賠償額の査定に当たって被害者の立場に立ってよくその内容を検討し、円滑に相手方の同意を得られるよう細心の注意をもって努力され次々と解決せるも、一瞬のうちに家もろとも吹きとんだ家財等の調査に困難をきわめ多くの時間を費やしたが、一年経た今日ようやく完了した。

しかし一つの派生的問題として借地借家の問題があり、これが意外にもつれ、関係者の努力にもかかわらず、墜落中心地の４世帯について１年経ていまだ解決せず、人々の心を暗くしている。

最近ようやく解決に曙光があるとはいえ、これらの問題について国の根本的方策を望むものである。

第２節　政府・国会の動向

政府は４月７日の閣議において、町田市で起こった米軍ジェット機墜落事故について、福田篤泰防衛庁長官の報告を聞くとともに、この事故で被害をこうむった人々に対する現行補償基準につき検討した。

その結果、この種の事故の被害者に対する補償額を、労災補償保険法に準じた補償方式では被害者の日収千日分、最高１５０万円止まりであり低すぎるので、方式をホフマン方式に改め最高３００万円に引き上げる方針を決めた。

また閣議に先だって福田防衛庁長官は、田中蔵相と協議し、死亡者に対する補償金

の緊急先払いをすることを決めた。

８日、自民党政調基地対策特別委員会と国防部会の合同会議が赤坂プリンスホテルで開かれ、次のような方針を決めて、直ちに池田首相、福田防衛庁長官、大平外相、田中蔵相、及び党三役に申し入れた。

「遺家族、重軽傷者並びに被災者に対し、すみやかに救援及び補償措置を講ずることと、現行補償基準を改定増額し、遺家族その他の被災者に対し手厚い補償措置が講ぜられるよう措置すること。」

なお、８日に開かれた参議院本会議において社会党（岡田宗司氏）より緊急質問が行われ、

１．米軍機墜落により日本国民の人命財産の損害がしばしば起こる根本原因

２．当面の事故防止対策

３．補償問題

等について鋭く質問された。

これに対し池田首相、大平外相、田中蔵相、福田防衛庁長官から、それぞれ次のように答弁されている。

「事故は公務中に起こったものであり裁判管轄は条約により米国にあるが、事態の究明を行い、市街地上空の飛行規制、パイロットの訓練の徹底など米側と強く交渉する。

被害者に対する補償額は現行補償方式ではあまりにも低いので早急に改正すべく関係各省と話し合っている（大要）。」

第4章　各方面の協力

第1節　日赤東京都支部

1．救護班の出動

4月5日午後5時頃米軍機墜落事故の報道により、武蔵野赤十字病院に1ヶ班の救護班を待機せしめると同時に、当支部事務局の無線関係者3名をもって連絡委員の編成をする。

同6時テレビニュースにより、負傷者続出の情報により待機中の救護班（医師1名、看護婦1名、事務員他3名）1ヶ班と連絡員（無線士3名）を現地に急派した。

患者の救護については、重傷者はほとんど付近の病院に収容されていたが、軽傷者4名の治療にあたり、救護本部と連絡をとりつつ、一応活動が終了、午後11時現地撤収した。

第2節　民間団体の協力

1．原町田2丁目町内会、同商店会、同婦人会

ジェット機墜落地点は原町田2丁目の中央部、正に晴天の霹靂、一瞬何事が起きたか、人々は皆目判明せず、驚愕、恐怖の中、事故を知り直ちに消防署へ連絡するもの、たちまち駆けつけた人達によりバケツリレーによる消火活動、直ちに到着した消防隊に協力、消火、救助に懸命の活躍をした。一方現場の混乱を防ぐため周囲の交通遮断による警戒に当たった。

事態の重大さを知り、午後5時30分町内守屋旅館に対策本部を開設、町内会長を中心に一致団結、援護活動、復旧活動に入った。

被害の調査に、炊き出しに、飛散物の除去、復旧に、被災者の援護に夜を徹して不眠不休の活躍は数日に及び、多くの人々より感謝されている。

2．商工会、町内会連合会

商工会、町内会連合会は事件後直ちに緊急役員会を開き、被災者の援護活動を開始するとともに、悲惨な事故への怒りから、「被害者へ最大の補償と爾後かかる事故の撲滅」に関係方面へ働きかけた。

余　録

1．災害日誌

4月5日

○原町田1274番地商店街に、米海軍F８U－２ジェット戦闘機墜落、死者４人、重軽傷者32人の惨事起こる。（午後４時28分頃）

○町田市臨時災害対策本部設置す。（午後５時）

○町田市議会は善後策を協議すると共に改めて明６日に全員協議会を開くことを決める。

○防衛施設庁は調査官を現地に派遣、東京防衛施設局の係官と補償のための調査を始める。

○福田防衛庁長官は、現地を訪れ事故について、「事故の原因をはっきりと確かめたい、その結果いかんでは米国側に賠償なり施設の改善なり措置を申し入れる」と語り弔意と重軽傷者を見舞う。（午後８時15分）

○在日米軍賠償部長ジョン・Ｖ・カナウス大佐が訪れ遺憾の意を表す。（午後11時50分）

○勝楽寺において犠牲者の通夜を行う。遺族を始め、町田市長、議長、米軍側（厚木基地憲兵隊司令官）等多数列席す。

○ジョンソン米大統領は池田首相に弔問の覚書を送る。（ワシントンＵＰＩ）

4月6日

○町田市議会は緊急全員協議会を開き、合同慰霊祭を行うことと、被害者への補償と事故の再発防止を望む決議を採択す。（９時）

○町田市商店連合会は緊急対策委員会を開き、被災者に見舞金及び米側に要望書を提出す。（８時）

○米軍厚木海軍航空司令官ウイリアム・Ｃ・ブライアン大佐、岩国基地司令官フランク・Ｃ・セアリー少将は牧師を帯同、被災現場を訪れ犠牲者の冥福を祈るとともに、青山市長をたずね深く陳謝し、負傷者を病院に見舞う。（９時）

○東京練馬陸上自衛隊第１師団偵察班到着（０時30分）、同先行隊到着（３時30分）、

同じく部隊主力到着す。（7時20分）

○現場検証　東京地検八王子支部検事2名、警視庁鑑識課、同捜査一課、東京消防庁原因調査課各係官及び米軍厚木基地フィッツ・シモンズ少尉等立ち会いのもとに現場検証をするとともに、エンジン発掘作業を行う。（午後1時）

○復旧作業　自衛隊、消防団、町内会、市職員協力のもとに復旧作業開始す。

○東京都知事　被害現場及び被災者を見舞う。

○社会党及び民社党の各調査団現地到着。（午後2時頃）

○死体解剖　死亡した4人の遺体を市内小田切病院において斉藤慶大教授、舟尾同助教授の執刀で解剖す。（午後1時～同8時30分）

○米軍賠償部長ジョン・V・カナウス大佐市役所を訪れ、青山市長、河合議長と用談する。（午後2時30分）

○合同慰霊祭　青山市長祭主となり、遺族、市議会議員外官公署各種団体及び小野防衛施設庁長官、加藤東京防衛施設局長、米軍側から、厚木海軍航空司令官ウイリアム・C・ブライアン大佐、岩国基地司令官フランク・C・セアリー少将、並びに一般市民400余人が参列しとり行われた。

○操縦士談話発表す。墜落戦闘機操縦士R・L・ボーン大尉は横須賀在日米海軍司令部を通じ、次のような談話を発表した。

「このような事故を起こして申しわけない。死傷者その家族、友人に心から陳謝し、おくやみ申します。」

○東京防衛施設局臨時事務所開設。（町田市役所内）

4月7日

○墜落機エンジン（土中20メートル）の引き上げ作業は意外に困難をきわめ、再三中止、引き上げ作業と繰り返したが、日本側、米軍側関係者話し合いの上、結局引き上げ作業を中止、埋没したまま地ならしが行われる。

○復旧作業　前日に引き続き自衛隊、消防団、市職員、地元関係者で行う。

○青山市長、河合議長は改めて被災者宅及び入院重軽傷者を見舞う。

○福田防衛庁長官は閣議で事故の報告を行うとともに補償額の引き上げを要望す。

また、田中蔵相も「従来の労災補償保険からホフマン方式に改めるよう検討したい。」と発言、閣議の了承を得る。

○日米合同委員会の事故分科委員会を府中市の在日米軍司令部で開き、「町田市上空の航路は変更することが望ましい。」という日米双方の意見一致をみた。(午後2時)

○池田首相、米大統領に返電を送る。

○事故補償交渉打合会開く。被災者、青山市長、河合議長、東京防衛施設局関係者によって開かれた。(午後1時30分)

○補償金の内払い。在日米軍賠償部長、青山市長を訪れ、市職員、防衛施設局員の案内で死亡者及び重傷者の家族を訪問、補償金の内払いをする。

4月9日

○町田市長は被災者の住宅について東京都と交渉していたが、結局米軍に要請、野戦用簡易住宅を原町田2丁目、三和遊園地広場に6世帯分を米軍厚木基地工作隊により建設始める。同時に水道、電気、調理場、便所等の付帯設備は市において施工す。

4月13日

○東京防衛施設局関係係官より建物被害者及び負傷者に補償金の内払いをそれぞれ行う。

4月21日

○第2回日米合同委員会、事故分科会が東京山王ホテルで開かれた。

2．関係者のメッセージ

1964年4月6日　駐日米国大使館

池田首相宛

米国大使館は外務省にたいして御挨拶を申し上げると共に、米国大統領よりの下記のメッセージを日本国総理大臣に御伝達下さるようお願い申し上げます。

「米国民を代表して私は原町田における飛行機事故による死亡者の御遺族にたいして深甚なる弔意を表しますとともに負傷者の方々にたいして同情の意を表します。

この旨貴大臣よりお伝えを願います。

在日米国代表者は被害者の援助のため万全の措置を講ずるでありましょう。」

リンドン・B・ジョンソン

1964年4月6日　日本東京外務省日米合同委員会

日本政府代表　竹内春海　殿

拝啓

米国ならびに在日米軍を代表して、茲に本官は1964年4月5日米軍F－8機が東京都町田市の商店街に墜落した事故にたいして衷心より謝罪の意を表します。

また4名の日本人市民の生命の喪失、多数の負傷者および財産の破壊にたいし深甚なる弔意を表します。

どのような言葉をもっても死んだ人々を生き返らせ、負傷者の傷を癒すことは出来ないでありましょうが、何卒、犠牲者の御遺族、負傷された方々、日本国民および日本政府にたいして、この謝罪の言葉と同情の微意をお伝え下さらば幸甚と存じます。

敬　具

合同委員会米国代表米国陸軍少将

E・A・チャップマン

1964年4月6日　駐日米国大使館宛

米国大使館は外務省に対して御挨拶を申し上げると共に、ディーン・ラスク国務長官よりの下記メッセージを大平外務大臣に御伝達下さるようお願い申し上げます。

「このたび原町田における飛行機事故を知り痛嘆にたえません。茲に貴大臣ならびに日本国民にたいして衷心より遺憾の意を表しますと共に犠牲者ならびに、その遺族にたいして満腔の哀悼の意を表します。」

ディーン・ラスク

要　望　書

1964年４月５日、午後４時28分頃、日本国東京都町田市商店会街に米軍戦闘機墜落し、一瞬にして４名の死者と30数名の重軽傷者を出し、店舗数店を跡形もなく全潰し、損傷商店多数に及びその惨たんたる状況は目を覆うものであった。

我々商店街としては、今後再びかかる惨事を惹起せぬため、全国の商店街上空はもとより住民密集地帯の上空の飛行を一切禁止するよう、亦今回の罹災者に対しては、最大限の補償をするとともに、特に商店経営者に対しては、格段の考慮をはらい誠意対策の確立されることを熱望する。

右要望する。

1964年４月10日

東京都商店街連合会
会長　中野喜介

町田市商店会連合会
会長　臼井　悟

東京都知事殿

1964年４月６日

在日アメリカ海軍司令官W・H・プライス海軍少将並びに当地海軍部隊の全員に代わり、私は昨日原町田で起こった最も不幸な事故による死傷者の家族及びその友人の皆さんに対して心からお悔やみの意を表したいと思います。

この惨事に当たり、わたくしたちの悲しみをとても言葉に表すことはできませんがあなた方の莫大な損失に対してわたくしたちの同情の気持ちは知っていただきたいと思います。

敬　　具

参謀長アメリカ海軍大佐

G・T・フラウエンハイム

米大統領に返電（池田首相）

町田市における墜落事故による死傷者の家族、日本国民に代わって大統領から寄せられた弔慰とお見舞いのメッセージに謝意を表します。

また今回の事故にさいし在日米軍から示された敏速な援助の申し出に感謝します。

3．救助活動協力者並びに感謝状関係

活動された方々

町田消防署、町田市消防団、相模原消防隊、町田警察署、陸上自衛隊、日赤東京都支部、原町田２丁目町内会外民間団体及び個人、伊藤、原町田両病院、等々

積極的に災害救助活動に、災害の拡大防止に尽力協力された方々の活躍は人心安定に大きく寄与し、その功績は誠に計り難いものがありました。

深く感謝の意を表する次第です。

町田市においては、町田消防署、町田市消防団、町田警察署、民間団体、個人の方々に感謝状に記念品を添えて功績をたたえた。

なお、町田消防署、町田市消防団第１分団に対し消防庁長官より表彰されるとともに、消防総監、警視総監より多くの人々が表彰されている。

む す び

航空機の近代化に伴い、万一事故が発生した場合、大事故または政治問題となりやすく、ことに駐留軍基地をめぐる国民感情は、思想的、政治的に各種の問題を含んでおり、世論がこの種の事故に深い関心を寄せていることは、国会および各報道機関においてことあるごとに採り上げている事実からも明らかなところであり、昭和３９年４月５日町田市に起こった米軍ジェット機墜落事故に際しても、その例にもれず、ジョンソン米大統領の異例のメッセージを始め各界から多くのメッセージが寄せられ、国会でもまた問題になった。

町田市における事故に続いて、隣接大和市、同相模原市にも相次ぎ起きており、全国各地でも同様である。

この種の事故防止のため万全の方策は確立でき得ないものだろうか。

過去に起こったいくたの事故の経験や、今度の事故の原因究明が徹底的になされなければならないであろうが、先ずは人命尊重の精神を徹底させることであろう。

日本の航空法第７５条の、機長は、その航空機に急迫の危難が生じた場合には、旅客の救助及び地上または水上の人または物件に対する危難の防止に必要な手段をつくした後でなければ機を去ってはならない、という旨の内容をもつ条項を空文にさせないことだ。

もちろん超音速のジェット機などでは我々常人の思惑外の事態など恐らく日常茶飯事であり、事故防止を単に搭乗員の心がまえのみに頼るわけにはいかないであろう。

それでは予期せぬ事故で被害を最小限にくいとめ、少なくとも今度のような大惨事に至らないようにするにはどうすればよいのだろうか。

考えられる方策の一つに、最も有効かつ重要なものは、「飛行機が密集した市街地の上空を飛ばないよう」にすることだ。

しかし、この問題は大都市周辺の軍事基地の問題になってくるであろう。

あと残された問題は、被災者に対する補償問題である。

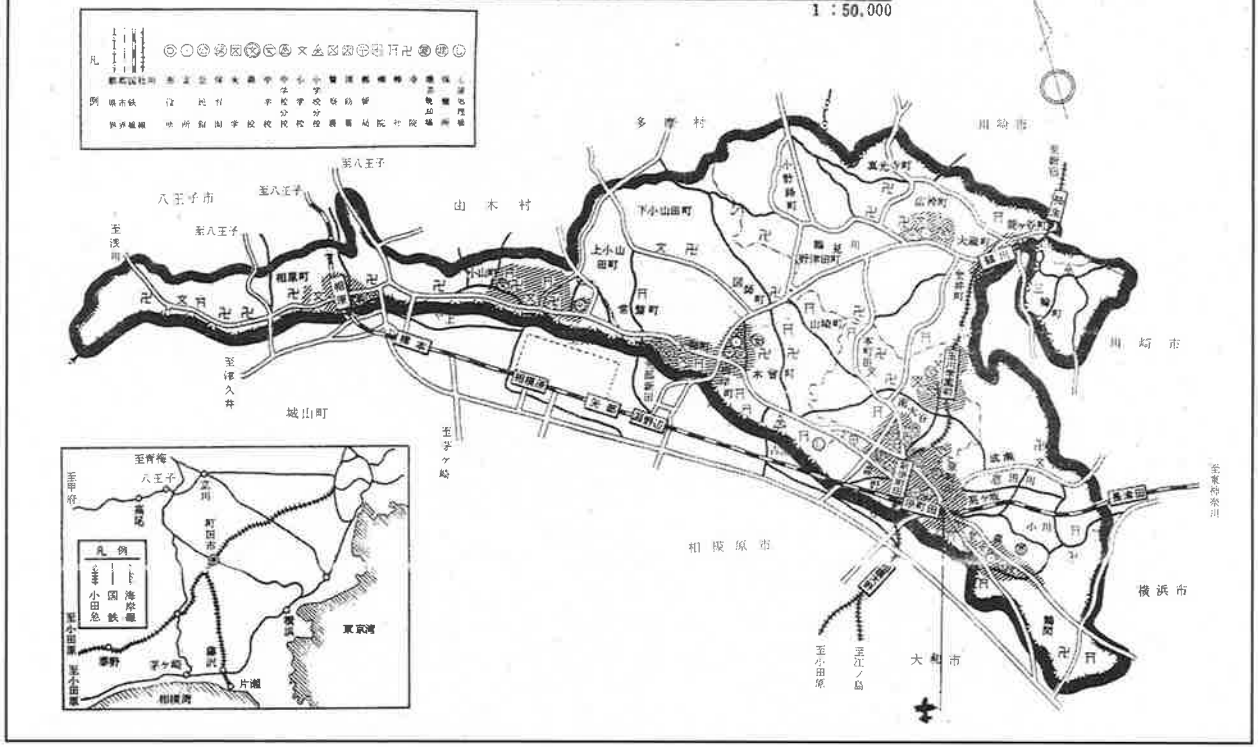
幸い政府も今度の惨事を機に補償額をホフマン方式に改め大幅に引き上げたもの

の、補償も表面的、平面的でなく、もっと広く、深く、ケース・バイ・ケースで適切妥当な方法をもって処理するべきで、派生的諸問題まで再検討されるべきであろう。

最後に、二度と再びかかる事故の起こらないよう念じつつ、不幸にして命をうばわれた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

町田市全図

1 : 50,000



昭和40年11月　印刷・発行

昭和39年　米軍機墜落事故災害誌

初　　版　昭和40年11月　印刷・発行
編集　発行　東京都町田市役所総務部庶務課
所　在　地　東京都町田市原町田5－8－24
復　刻　版　平成14年3月　印刷・発行
発　　行　東京都町田市役所企画部企画調整課
所　在　地　東京都町田市中町1－20－23
TEL　042（722）3111(代)
印　刷　所　株式会社芳文社
東京都町田市忠生1－18－18
TEL　042（792）3100

※復刻版発行に当たって、原文の旧漢字を原則常用漢字に、旧仮名遣いを現代仮名遣いに改め、誤字等を訂正した。また、個人情報保護のため個人の氏名、住所や個人が特定できる記述等を削除、訂正した。

刊行物番号：01-101